

主 題：神の栄光と誉れを現す秘訣

聖書箇所：ピリピ人への手紙1章9－11節

命 題：救われた聖徒は神の栄光と誉れを現す

皆さん、おはようございます。皆さんと一緒に神を礼拝できることを感謝します。ずいぶん暖かくなってきました。この前のゴールデンウィークは、きっと皆さんもそれぞれ家族と時間を過ごしたり、中には学校の文化祭に参加された方、またどこかにお出かけになった方もいらっしゃるでしょう。きっとその連休のために、前もって予定を立てたり、いろいろな時間の使い方をお考えになったのではないのでしょうか？どこに行こうか、だれとどのように時間を過ごそうかと。どうしてそのように予定を立てるのかと言えば、予定を立ていろんな計画を立てないと、たちまちのうちにその時間は過ぎ去ってしまうからです。私たちは連休を有意義に過ごしたいので、よく考えて予定を立てるわけです。

では、私たちの人生についてはいかがでしょうか？皆さんはその人生の時間をどのように計画し、考えていらっしゃるのでしょうか？昔、大学生の頃、私は友人たちと「自分の人生でどのような生き方をしたいのか」という相談をしたことがあります。ある友人は私にこのように言いました。「私は、私の人生の中で自分のしたいことをしたいんだ。好きなところに行き、自分の食べたい物を食べ、自分の好きな人と時間を過ごしたい。そして人生の終わりには、『私は自分の人生が本当に楽しかった、満足だ』と言ってこの世を去りたい。君の言う神について、もし信じるとしたら、私の人生の終わりの間際になって、もう一度考えてみたい。」と。またある友人は「私はいろんな地位や名誉を手に入れたい。いろんな財産を築いて、自分の家族を持って、そして一生を家族とともに過ごしたい。そして自分の財産を家族や子どもたちに任せて、家族に見守られて満足してこの世を去りたいんだ。」と語りました。また、ある友人は違う夢を持っていました。「私はいろんな研究をして、いろんな病気や薬の研究をしたい。そしてこの社会で役立つ立派な業績を残したい。私がこの世を去った時に多くの人がある働きを見て素晴らしいと言ってくれる、そのような人生を過ごしたいんだ。」と。

さて、皆さんはどのようにお考えでしょうか？今、具体的な例をあげた私の友人たちそれぞれの考え方に、共感される方がいらっしゃるかもしれません。でも、聖書が教えてくれる私たち聖徒の生き方について、パウロは少し違う考えを述べています。パウロは1コリント6：20で「あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現しなさい。」また、1コリント10：31で「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい」と語りました。もし私たちの人生が神なしに過ごすのであれば、私たちは自分の好きなことを追い求め、地位や名誉を追い求め、また周りの人たちからの称賛を受けることを願うかもしれません。でも、私たち救われた者は、神にあってどのように生きるのか、神の前に出た時にどのような評価を神から受けるか、そのことについて私たちは考えざるを得ません。

これまで私たちはピリピ1：1－2を通して、パウロの挨拶を見ました。パウロは、「キリスト・イエスのしもべ、奴隷であるパウロとテモテから、ピリピにいるキリスト・イエスのうちにあるすべての聖徒たち…へ」という、「救われた私たちは、天国の民であり、神のものである」ということをご一緒に学んできました。また、今回はパウロの感謝が書かれている3－8節を通して、救われた私たちは単に罪から救われただけでなく、神がイエス・キリストに似た者へと変えてくださる「聖化」という救いを私たちのうちに成してくださり、そして神ご自身が私たちの救いを完成してくださる、ということを見てきました。きょうのテキストである9－11節で、パウロはそれに続いてパウロの祈りを記しています。パウロはピリピの聖徒のために祈りました。そしてこの9－11節を通してパウロが述べた祈りが、まさに今、私たちが話していた「神の栄光と誉れを現す秘訣」について教えてくれています。

今までに「あなたが生きる目的は何ですか？」という質問に対して、皆さんはきっと、「神の栄光を現すことです。神のすばらしさを現すことを私は願っています。」と返事をされたかもしれません。では、

その神の栄光が現される秘訣についてはご存じでしょうか？ また、神の栄光が現されるためには、私たちの成長のステップがあるのをご存じでしょうか？きょうの9-11節を通して私たちが見ることができるのは、「救われた聖徒は神の栄光を現す者となる」ということです。きょうのメッセージの命題は「救われた聖徒は、神の栄光を現す者となる」ということです。私たち救われた聖徒が、神の栄光と誉れを現すのです。きょうは神がどのように救われた聖徒のうちに働きを成して、神の栄光を現す者とされるのかをご一緒に見て行きたいと思います。そのために、まず、本日のテキストであるピリピ1：9-11をお読みいたします。

あ、そうです。皆さん、この後、私がテキストの聖書箇所を読むときに、少し区切ります。三つの部分に分けて、間をあけて読みますので、どこで区切れているか、どうか注意してお聞きください。

ピリピ1：9-11

①まず一つ目の部分です。

「：9 私は祈っています。あなたがたの愛が真の知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、
あなたがたが、真にすぐれたものを見分けることができるようになりますように。」

(ここまでが、まず一つ目の部分です)

②次に二つ目の部分です。

またあなたがたが、キリストの日には純真で非難されるところがなく、：11 イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされている者となり、(ここまでが二つ目の部分です)

③最後に三つ目の部分です。

神の御栄えと誉れが現されますように。」(これが三つ目の部分です)」ここまでは。

さて、まず、このテキストで、皆さんに理解していただきたいことがあります。それは、この文章が構造の上で、「何々のために」という目的のために、大きく三つに分かれるということです。ちょうど、表彰台のように三つの段があるとすると、表彰台の一番上にあるのは11節にある、「神の御栄えと誉れが現されますように。」ということです。そして、その「神の御栄えとほまれが現される」という目的のために、二段目は、10、11節に出てくる「：10 …あなたがたが、キリストの日には純真で非難されるところがなく、：11 イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされている者とな」ということです。これが二段目にあたるわけですね。そして、「あなたがたが、キリストの日には純真で非難されるところがなく、イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされている者となる」というその目的のために、三段目の土台となる部分が、9-10節に出てくる「…あなたがたの愛が真の知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、あなたがたが、真にすぐれたものを見分けることができるようになりますように。…」ということなのです。

簡単にまとめてみます。言い換えるなら、神の栄光を現す目的のためには、神のみこころを行うことが土台となります。また、神のみこころを行うという目的のためには、神のみこころを見分けることが土台となるわけです。順を追って一緒にみていきましょう。

A. 神のみこころを見分ける者となる

さて、神の栄光と誉れを現す者となる秘訣の一つ目のポイント。それは「神のみこころを見分ける者となる」ということです。9-10節をご覧ください。

「：9 私は祈っています。あなたがたの愛が真の知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、：10 あなたがたが、真にすぐれたものを見分けることができるようになりますように。」ここまでは。この中で「神のみこころを見分けることができるようになること。」これが神の栄光と誉れを現す一つ目のポイントなのですが、その中には、さらに二つのことが書かれています。一つ目は「あなたがたの愛がいよいよ豊かになること」と、二つ目は、「真の知識とあらゆる識別力を備えた者となるということ」です。この二つにより、聖徒は真にすぐれたものを見分けることができるようになりますと書かれています。

①愛がすぐれたものとなる

まず、神のみこころを見分ける第一の点である、「あなたがたの愛が…いよいよ豊かになる」ということについて見ていきます。

ご覧いただきますとパウロは「あなたがたの愛が」と述べました。この「あなたがたの」ということは、「属格」と言って、「この愛はあなたに所属するものであること」を表しています。つまり、すでに、

あなたのうちにある愛であり、あなたのうちに神から与えられた愛です。そしてこの「愛が」というのは、「アガペー」ということばが使われています。私たちが友情とか夫婦の間で持ついろんな感情的な愛ではなく、神が私たちにイエス・キリストを通して示してくださった、神の一方的な条件を問わない愛のことです。また、この9節で原文の冒頭には「カイ」という接続詞があって8節とつながっていることがわかります。8節ではパウロはこの愛について少し説明を加えています。「私が、キリスト・イエスの愛の心をもって、どんなにあなたがたすべてを慕っているか、そのあかしをしてくださるのは神です。」パウロは「キリスト・イエスの愛の心」と言っています。その愛の心をもって、パウロはピリピの聖徒を慕っており、また祈りをしているという文書が続きます。文脈からこの「あなたがたの愛が」というアガペーの愛は、「神がイエス・キリストを通して私たちに示してくださった愛」であり、「救われた聖徒であるあなたがたひとりひとりのうちに神から与えられた愛」です。皆さんは、この愛についてすでによく聞かされていることと思います。でも、まずその愛がどこから与えられているのかをもう一度見てみましょう。

1) 愛は神から出ている Iヨハネ4：7-10、13、16-17

Iヨハネ4：7-10でヨハネはこのように述べています。「7 愛する者たち。私たちは、互いに愛し合いましょ。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。8 愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。9 神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」聖書は明確に記してくれています。愛は神から出ており、神によって私たちはこの愛がどのようなものかを知りました。そして、この神の愛は、救われた私たちのうちに与えられ、それゆえに、私たちは神を愛し、救われた者は互いに愛し合う、その神の命令を守るわけです。

2) 愛は神に従う意思である（感情だけでなく）Iヨハネ5：3

この愛は、私たちがドラマやいろんな人間のあいだで語り合う気持ち、感情の愛…そのような単なる感情ではなく、意志を伴うものです。私たちがすでに、あなたの神を愛しなさいと命じられ、感情ではなく、意志をもって喜んで神にみずからをおささげし神を愛そうとするように。私たちはこの神にあって救われ、愛されたその救いの喜びのゆえに、喜んで神に従おうとします。Iヨハネ5：3にそのことが出てきます。神を自らの意志を持って愛そうとする聖徒は、その愛のゆえに、神の命令を守ることが重荷とはならないのです。Iヨハネ5：3で「神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません。」と述べています。その人は喜んで神を愛するので、従順に神に従うことが重荷とはならないのです。

思い返してください。「9 神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛がわたしたちに示されたのです。10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」このIヨハネ4：9-10にあるように、私たちが神様を愛したのでありませんでした。私たちは、神にあって創られ、神にあって生かされ、いつの日か召されて神の前に出る者です。しかし、かつての私たちができたことは、神に逆らい、神のみこころを行うことができず、神の基準に到底達しない者でした。私たちは生まれながらに神の御怒りを受ける者であり、人間には死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっていた。私たちすべての者が神の前に罪の罰を、永遠のさばきを受けて当然の者でした。でも、聖書が示してくれたのは、その私たちが神が愛し、罪から救ってくださるという神の救いのご計画です。そして私たちが信じて、その罪からの救いを受け入れたときに、その救いが私たちのものとなりました。それゆえに、救われた私たちは救いを喜び、感謝し、神を愛する者として、今、生きて行くことができるのです。

3) 愛は神によって注がれ続けている ローマ5：5

また、この愛は神から出ているだけでなく、神によって注がれ続けている愛でもあります。ローマ5：5で、このようにパウロは述べています。

「この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」今、私たちは、神の栄光を現すために、私たちのうちに与えられている愛が、神のみこころを見分ける動機なのだという事を見ています。そして、その愛は神から出ているという

ことを、Iヨハネを通して見ましたが、ローマ5：5で、「神は、聖霊によって、神の愛を私たちの心に注ぎ続けてくださっている」ということが記されていました。私たちが自分自身の弱さを覚えるとき、毎日の中で私たちに愛を示し、神がどれほど私たちが愛してくださっているかを知ることができるのは、神が聖霊によって私たちに愛を注いでくださっているからである、とみことばは教えます。また、私たちはこの愛について、イエス・キリストの模範を、その愛を示された姿を思い返すときに、明確に知ることができます。なぜなら、イエス・キリストの十字架の死と復活が、私たちの罪のためにささげられた神の愛の具体的なしるしであるからです。私たちは愛が神から出ており、また神から愛が注がれ続けていることを知るのでした。

4) あなたの愛がいよいよ豊かになる

さて、ピリピ1：9でパウロは「あなたがたの愛がいよいよ豊かになり」と述べています。この「豊かになり」ということばは、辞書には「豊かに持つ、すぐれる、まさる」。そのようなことばが出てきます。愛（アガペー）は単数形ですから、文脈からも、「愛がすぐれたものになる」と考えられます。パウロはピリピの聖徒に対して「あなたがたに愛が与えられるように祈ります」とは言いませんでした。「いよいよ豊かになり」と言っています。すでにご一緒に見てきた通り、ピリピの聖徒たちは愛を実践する人々でした。パウロの必要のために自発的に贈り物をくり返し送り、パウロの必要を満たしました。また、エパフロデトというピリピ教会のメンバーを派遣しました。パウロを実際に愛して、働きをともにしてサポートし、その働きのために祈っているということ、実践をもって現しました。ピリピの聖徒たちは愛をもって喜んで仕えました。それゆえに、彼らは救われた喜びと神への愛をもって、救われたその日から福音宣教の働きを続けていたのです。愛をもって仕えました。パウロはすでにピリピの聖徒たちが、神を愛し、ほかの兄弟姉妹たちを愛し、またピリピの町において、愛をもって神の福音を伝え続けてきたことを知っていました。3-8節を通して、パウロが神にささげた感謝がそうでした。ピリピの聖徒たちは、救われたその時から変わらず神を愛し、その愛と、救われた喜びのゆえに神に仕える者となりました。パウロに贈り物をささげ、また愛をもって仕える者として成長していったのです。でも、パウロがここで言うのは、そのピリピの聖徒たちの愛がますますすぐれた愛に変えられること、成長することです。

皆さん、神のみこころを見分ける者とされる第一のポイントは、皆さんの「愛」です。皆さんの愛が動機となって、神のみこころを見分けるのです。神のみこころを見分け、神に従いたいと願うのは、あなたのうちに与えられた神からの愛があるからです。私たちが自分自身を神にささげ、日曜だけでなく、毎日、神を礼拝する者として神にお仕えし、何が神に喜ばれるかを求めるのは、私たちが神を愛するからです。パウロはこのように神のみこころを見分けるために、愛がすぐれたものとなることを祈りました。しかも、この愛は、範囲が決められていません。私たちは、神に対して愛する者です。そして、また、人を愛する者です。それが神の命令でした。

では、私たちの愛はどのようなのでしょうか？私たちの愛は成長しているのでしょうか？まず、私たち自身が神を愛する者として神との関係に感謝し、父親と子どものように親しい交わりを喜びとしているのでしょうか？私たちの模範である主イエス・キリストは、父なる神との間に親密な関係をもっておられました。私たちと神の関係は、救われた時からもっとも親密な関係となり、私たちはさらに神を信頼する者になっているのでしょうか？神のみことばを読み、聞いて、神をより深く知る者となり、感謝をもって、愛をもって、神に個人的な礼拝生活をささげているのでしょうか？すでに見てきた通り、私たちは神の一方的な愛により救われました。自分がどれほど偉大な神の愛と恵みによって救われたのかを思い返すなら、私たちは心から神を愛したいと願います。私たちは、自分の罪の代価のために主イエス・キリストが十字架についてくださり、実に十字架の死にまで従い神の愛を示してくださったことを思い返すときに、喜んで神を愛したいと願います。私たちは、自分が信じお仕えする神を愛する者として、また、神の命令に従順に従う礼拝者として生きていくことができます。

また、私たちは人を愛する者です。聖徒は教会にいる兄弟姉妹を自分の神の家族として愛しますし、また、自分の隣人を愛して生きようとします。それが神の命令でした。今の時間ですべてを見ることはできませんが、私たちは愛をもって寛容で、親切な生き方をしているのでしょうか？寛容な…つまり、人からされた悪に対して仕返しをしたりしないことです。誤りがあれば罪を指摘して、みことばに従うことを愛をもって勧めますが、悔い改めたならば赦し、その罪についてうわさ話をしないのです。また、親切であ

ること、つまり、相手に対して良いと考えることを自発的に私たちがするのです。私たちは他の人を愛するキリストの弟子である、とすべての人々が認める聖徒として生きているのでしょうか？とても、難しいことです。しかし、私たちが成長させてくださるのは神です。なぜなら、愛は神から出ており、神が愛を注いでくださり、神によって、私たちの愛がいよいよすぐれたものにされるからです。私たちは、神の前に愛がすぐれたものとなり成長することを願うことができます。

②真の知識とあらゆる識別力を備える

さて、9節には、さらに二つ目の神のみこころを見分けるものとなるポイントが書かれています。二つ目は「真の知識とあらゆる識別力を備える」ことです。この「真の知識」と「あらゆる識別力」という二つのことは、すでに見てきた通り、愛がすぐれたものとなるように成長した聖徒に備わるものです。聖書の文章では「真の知識とあらゆる識別力によって」と書かれています。原文にはここに「エン」という前置詞が使われていて、聖書で訳されている通り「何々によって」とか、「間に」「中に」などと訳される前置詞です。でも、別に「ともに」という訳もあることばです。9節の文脈で、愛がすぐれたものとなり、この愛が大切なもの、すぐれたものを見分けるという目的のために、真の知識とあらゆる識別力が必要ですから、「真の知識とあらゆる識別力とともに」大切なもの、すぐれたものを見分けることができます。つまり、9節を言い換えて訳すところのようになります。「私は祈っています。あなたがたの愛がいよいよすぐれたものになり、真の知識とあらゆる識別力とともに、あなたがたが真にすぐれたものを見分けることができるようになりますように。」ということです。つまり、この真の知識とあらゆる識別力という二つのものが、神のみこころを見分ける者にとって必要です。この二つ目のポイントについて、順に見ていくことにします。

1) 真の知識

さて、一つ目は「真の知識です。」この真の知識というのは 辞書では「知り尽くす」という意味です。「厳正で正確な知識、認識」という意味です。聖書のほかの箇所では、ローマ1:28やエペソ1:17、エペソ4:13やコロサイ1:9-10などで出てきます。これらは、すべて神に関する知識について書かれています。「真の知識」について見るために、コロサイ1:9-10を見てみましょう。そこでは、ピリピと同様にパウロがローマの獄中から書いたコロサイの手紙の中にあるパウロの祈りが書かれています。「:9 こういうわけで、私たちはそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈り求めています。どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされますように。:10 また、主にかなった歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、神を知る知識を増し加えられますように。」「神のみこころに関する真の知識に満たされますように。」パウロは愛において成長した聖徒が、神のみこころに関する真の知識を持つことを祈っています。神のみことばである聖書から、神のみこころ、真の知識を知るのです。神のみことばを知ることがなければ、神のみこころを見分けることができません。何が神の前に喜ばれるのか喜ばれないのかは、聖書のことばによって明らかとなります。

でも、その真の知識で神のみこころを見分けるためには、愛が必要でした。パウロは単に「真の知識によって、あなたがたが神のみこころを、大切なことを見分けることができるようになりますように」とは言いませんでした。考えてみると、パウロはIコリント13:1-2で「たとい、知識があっても、愛がなければ何の役にも立たない」と言っています。「:1 たとい、私が人の異言や、御使いの異言で話しても、愛がないなら、やかましいどらや、うるさいシンバルと同じです。:2 また、たとい私が預言の賜物を持っており、またあらゆる奥義とあらゆる知識とに通じ、また、山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がないなら、何の値うちもありません。」パウロが言うのは、愛が必要であるということです。神のみこころを見分ける動機が愛であり、愛が真の知識とともに、何が神のみこころかを見分けるのだということを教えてくれています。たしかに、聖徒が神のみこころを見分けて生きていくためには、真の知識が必要です。私たちの周りにはいろいろな偽りがたくさんあります。サタンがアダムとエバを誘惑したように、またイエス・キリストを誘惑しようとしたように、私たちの周りには神の真の知識以外のいろいろな偽りが存在します。ですから、私たちが生きるためには、神のことばにより与えられる真の知識が必要です。でも、その中であって、私たちが神を愛し、神のみこころを求めて生きて行くためには、神から与えられる愛が必要なのです。

また、知識ではなく、愛に基づいた判断が大切であることを、主イエス・キリストご自身も教えられました。マタイ9：13とマタイ12：7のところで、パリサイ人たちが自分たちの知識や習慣をもとにイエス・キリストに質問をして責め立てました。彼らの質問は、イエス・キリストが取税人や罪人と一緒に食卓につくことが問題ではないのか？とか、弟子たちが空腹であったときに、安息日に麦畑の麦の穂を摘んで食べ始めたことについてとがめる質問でした。主イエス・キリストはこの質問に対してホセア6：6から聖書のことばを引用してお答えになりました。2017年版の新改訳聖書でホセア6：6には次のように書いてあります。「わたしが喜びとするのは**真実の愛**。いけにえではない。全焼のささげ物よりむしろ、**神を知ることである**。」パリサイ人たちは自分のもっていた知識や習慣に基づいて判断しました。しかし、イエス様がおっしゃったことは、その心に愛があるか、ということでした。あなたの心が、神を愛し、人を愛すること、その愛が動機になっていますか？という判断でした。私たちはどうでしょうか？神のみこころを求め神の栄光を現すために、私たちは神を愛し、その愛に基づいて従おうとしているでしょうか？

2) あらゆる識別力

次に、ここで「あらゆる識別力」ということばが出てきます。この「識別力」ということばは、聖書ではこの一箇所だけに出てきます。認識する、理解するというようなことばです。知覚や感覚の力、認識する力です。どうして、パウロは識別力が必要であるといったのでしょうか？それは間違った教えや間違った生き方をする人々の影響から身を守るため、神の前に正しい判断をする識別力が必要だからです。ピリピ3：2には「どうか**犬に気をつけてください**。悪い働き人に**気をつけてください**。肉体だけの割礼の者に**気をつけてください**。」とパウロは悪い働き人に気を付けるようにピリピの聖徒に警告しました。また、ピリピ3：17-19には、十字架の敵としてこの世を生きている人たちについて述べています。私たちが神のみこころを知り従うためには、私たちに与えられている識別力を十分に働かせる必要があります。このみことばにあるとおり、「あらゆる識別力」が必要なのです。

さて、ここまで見てきたことを整理してみると、神のみこころを見分けることができる人は、愛がすぐれたものとなり、真の知識とあらゆる識別力で、神のみこころを見分ける人です。10節をご覧くださいと、「あなたがたが、真にすぐれたものを見分けることができるようになりますように。」とパウロは述べています。2017年版では「あなたがたが、大切なことを見分けることができますように。」と書かれています。この「見分ける」とは、「試みる」ということばから派生していて、「試す、吟味する、検討する」とか、「(試験して)価値があると認める」という意味です。当時は金属やお金の硬貨が純粋で混じりけがないものか、あるいは偽物であるかを試してみることを意味しました。本当の愛は、本物と偽物を見分けることができるのです。何が神の前に大切なすぐれたものであるかを見分ける動機として、愛が判断するのだということなのです。

また、「大切なこと」ということばは他の聖書箇所では「すぐれたもの、価値があるもの」と訳されています。例えば「空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。」とマタイ6：26では語られています。2017年版は「価値がある」と訳しています。神の前で「すぐれたもの、価値があるもの」を見分けるということです。ちょうど、エペソ5：8-10で、「：8 あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。：9——光の結ぶ実、あらゆる善意と正義と真実なのです——：10 そのためには、主に喜ばれることが何であるかを見分けなさい。」2017年版では「何が主に喜ばれることなのかを吟味しなさい。」とある通りです。光の子どもらしく、私たちは、主に喜ばれることを見分け吟味して生きることを命じられていました。神のみことばから、何が喜ばれることなのか、また逆に喜ばれないことであるのか、罪なのかを見分け、神の前に神のみこころを見分ける者となるのです。私たちは問わなければならないかもしれません。私は本当に光の子どもだろうか？私は本当に神にあって救われて生きており、神に喜ばれることを見分けているだろうか、という吟味です。

ウォーレン・ワーズビーは注解書の中で次のように述べています。「両親を愛して、その両親を喜ばせる生き方をしたいと願っている子どもに、その子どもの友だちが来て、その子に悪いことをするように誘ったとする。ある子どもがその友人から悪いことに誘われた時、たとえば泥棒することについて、

それは法律に触れる悪いことだからしたくないと、その知識が仮にあるとしても、それ以上に、私はお父さんお母さんを愛するから、そのお父さんお母さんを悲しませたくないゆえに、そのような悪いことをしたくないと思う。その子にとっては自分の知識もありますが、その両親への愛が正しいことを見分け、罪ではなく正しいことをするその動機となるわけです。」私たちの判断は、神への愛に基づきます。申命記6：4-5に「:4 聞きなさい。イスラエル。【主】は私たちの神。【主】はただひとりである。:5 心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、【主】を愛しなさい。:6 私がきょう、あなたに命じるこれらのことばを、あなたの心に刻みなさい。」とある通り、私たちは唯一の神を自分自身の神と認め、神を愛して従います。また、ローマ12：2には、2017年版でお読みしますが「:2 この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。そうすれば、神のみこころは何か、すなわち、何がよいことで、神に喜ばれ、完全であるのかを見分けるようになります。」と書かれています。聖書は、聖徒が神のみこころを見分けて、価値のあるもの、すぐれたものを見分ける者とされることを教えてくれています。このことをパウロは祈ったわけです。神の栄光とほまれが現される秘訣の一つ目のポイントは、「神のみこころを見分ける者となる」ことでした。私たちの愛がすぐれたものとなり、真の知識とあらゆる識別力とともに、神の前に価値のあること、大切なこと、つまり、神のみこころを見分ける者とされるということを見てきました。

B.神のみこころを行う者となる

神の栄光を現す秘訣の二つ目のポイントが10-11節に出てきます。二つ目のポイントは、「神のみこころを行う者となる」ということです。神のみこころが行われなければ、神の栄光を現すことはできません。10-11節「:10 またあなたがたが、キリストの日には純真で非難されるところがなく、:11 イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされている者となり」と書かれています。神のみこころを見分けた聖徒は、神の前にふさわしい者とされ、神のみこころを行います。

キリストの日に備えて…

まず、「キリストの日には」2017年版では「キリストの日に備えて」とあります。これは、キリストの再臨、私たちが主イエス・キリストにお会いする日に備える、ということです。「キリストの日には純真で非難されるところがなく」とあります。皆さん、私たちはキリストにお会いする備えをしているのでしょうか？備えをしたいと願っているのでしょうか？イエス・キリストが最後の晩餐で弟子たちに話された「:2 あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。:3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」(ヨハネ14：2-3)とある通り、イエス様の約束は、私たちを迎えに来られるということです。場所を備え、迎えに来る、イスラエルの結婚式を想像させます。私たち聖徒は、キリストの花嫁です。皆さんの中で、結婚しておられる方はいますか？ご自身の結婚式のためには準備をされませんでしたか？特に女性の方であれば、ウェディングドレスや靴を準備したり、人によってはエステなどに通われる方もいらっしゃるでしょう。何よりいろいろな準備が必要です。ケーキや飾りつけなど、さまざまな準備をし、決して服やドレスにシミがあってははいけません。私たちはキリストの日に備えて、自分自身の備えをするのです。

1) 純真な者となる

まず、「純真なものとなる」ということがあります。「純真で」ということばは辞書では「虚偽がないこと、嘘偽りがなく、本物であること」を示します。パークレーによると、「純真な」という「エイリクリネース」は、もとも「太陽の輝き」を意味する「エイレー」と「さばく」を意味する「クリネイン」から複合されたことばで、陶器などを太陽の光に透かしてみても傷がないことを表わし、試験に合格することを表わします。嘘偽りのないもの、本物であることです。神の前に私たちはうそを言うことはできません。心を隠すこともできません。神の目の前に正しい、偽りのない姿であるかどうか、それが「純真で」ということです。私たちは神の前に隠し事ができません。私たちはその神の前に純真な者であるかどうかを問われるのです。私たちは神を畏れ、神を敬い 純真な者として日々整えられる必要があります。私たちの罪が示されたならば、その罪を悔い改め、神の前に純真な聖徒として生きる必要があるのです。

2) 非難されるところのない者となる

ここに出てくる「非難されるところがなく」とは、「つまずきとならない」とか、ほかの人から指をさされて「責められるところのない」ということばです。同じことばを、使徒24：16でパウロは次のように用いています。「そのために、私はいつも、神の前にも人の前にも責められることのない良心を保つように、と最善を尽くしています。」このようにパウロは、人に対しても、神に対しても、責められることがないように、最善を尽くしたと述べています。また、1テサロニケ5：23では「平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリストの来臨のとき、責められるところのないように、あなたがたの霊、たましい、からだは完全に守られますように。」と述べています。パウロ自身も、神の前に、また人の前に、非難されるところのない者として生きようとしていました。神のみこころを行う聖徒は、純真な、神にも人にも非難されるところのないものとして生きることができるよう、キリストの日に備えようとして、聖徒は神のみこころを見分けて従順に従い生きて、非難されるところのない者となるのです。

3) 義の実に満たされた者となる

「非難されるところがなく」は、11節の「イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされている者となり、」ということばにかかります。聖徒は純真で、非難されるところのない者となり、義の実に満たされている者となるということです。この「義の実」はイエス・キリストによって与えられる、と書かれていました。パウロは同じピリピ3：9で、私はキリスト・イエスの義を追い求める、と教えています。「キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。」私たちは、主イエス・キリストを自分の罪からの救い主と信じ、そして、罪が赦されました。この「義」というのは、神が受け入れてくださる状態であり、罪がない、神が正しいと認めてくださることです。また「満たされている」ということばについては、「満たす」とか「いっぱいになる」とか「完成する」という意味があります。マタイ13：48では、魚が網いっぱいになった、満ち満ちた様子が、この「義の実に満たされた」という表現で使われています。つまり、救われたあなたが神のみこころを行う者として、イエス・キリストを通して与えられる「義の実」つまり、神の前に喜ばれる行ないでいっぱいになった者となる、ということです。

この実について、ヨハネ15：4-5で、ぶどうの木と枝のたとえをイエス様が話されました。「4 わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。5 わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。」どのようにして私たちは実を結ぶのでしょうか？イエス・キリストにしっかりと結ばれてとどまることです。「わたしの愛の中にとどまりなさい」と言われたように、私たちは、イエス様の愛にとどまります。そして私たちは実を結ぶのです。主イエス・キリストの愛を離れて、キリストから離れては、実を結ぶことはできません。私たちは救い主であるキリスト・イエスによって与えられる義の実を結ぶのです。ヤコブ1：22に「また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。」また、2：26には「たましいを離れたからだは、死んだものであるのと同様に、行いのない信仰は、死んでいるのです。」とあるように、キリストの愛にとどまり、キリストに結ばれて、信仰に生きる聖徒は、みことばを行う者、神のみこころを実行する人になります。

また、私たちが結ぶ実とは、私たちがどのような人物であることを表します。マタイ7：17-20で「17 同様に、良い木はみな良い実を結ぶが、悪い木は悪い実を結びます。」「20 こういうわけで、あなたがたは、実によって彼らを見分けることができるのです。」とあるように、私たちの行い、私たちの結ぶ実が、私たちがどのような人物かを明らかにします。私たちが、神を信じて従うと言っているでも良い実を結ぶことができず「主よ、主よ、」といいながら父なる神のみこころを行わず、キリストのことばを聞きながら実行していないなら、私たちの信仰はむなししいものです。私たちは自分の信仰を吟味する必要があります。本当の信仰は、神のみこころを見分け、神のみこころを行うからです。このように、私たちが神の前にどのような実を結んでいるのか、神のみこころを行う者としてどのように生きているのか、私たちは注意する必要があります。皆さん、私たちは神のみこころを行う者とされているのでしょうか？ちょうど、山上の説教マタイ5：16でイエス様が「このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを

見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」と言われたように、私たちの良い行いを人々が見て、父なる神があがめられることを私たちは願います。

【結果】神の栄光と神のほまれを現わす者となる

さて、最後に11節には、神のみこころを見分け、神のみこころを行った結果が記されています。その結果とは、神のみこころを見分け、神のみこころを行う聖徒は、「神の栄光と誉れを現す者となる」ということです。まさに天国の民として、救われた聖徒は、神の栄光と誉れを現します。11節をご覧くださいと、パウロは、「神の御栄えと誉れが現されますように。」2017年版では「神の栄光と誉れが現されますように。」とパウロは祈りました。この「神の栄光」とは、栄光、輝き、栄華、壮麗、威厳、尊厳などであり、神の栄光、すばらしさが人々に明らかにされるということです。もう一つの「誉れ」とは、ほめ上げるとか、称賛、誉れ、賛美という意味です。つまり、神の栄光が現されて、神がほめたたえられることを現します。しかも、このことばは「神の」と書かれていて、創造主であられる唯一まことの神のすばらしさが、聖徒を通して現されることを示しています。実際に、私たちの主、イエス・キリストがこの地上で神のみことばを語られ、神のわざをなさったときに、周りにいた人々は神をほめたたえました。そして、今は聖徒である私たちが、神のみこころを見分けて、神のみこころを行うときに、神の栄光と誉れが現されるということです。私たちが神の栄光を現す者とされるとは、本当に感謝なことです。

皆さんいかがでしょうか？私たちは、救われた聖徒が、神の栄光と誉れを現す秘訣を見てきました。ところで、皆さんに質問があります。なぜ、パウロはこのように祈ったのでしょうか？ここで皆さんお気づきのよう、私たち聖徒がこのように成長し変えられていくのは、すべて神のみわざです。前回、神が私たちに罪から救ってくださっただけでなく、私たちのうちに良い働きを始め、聖化という救いを完成してくださることを見ました。これは、すべて神が私たちに成し遂げてくださる働きです。すべて神の働きである。それゆえに、パウロは祈ったのです。私たちは自分の力で神の栄光を現すことはできません。しかし、神が私たちに成長させ、神が神ご自身の栄光を現すことができるように私たちに救ってくださるなら、神の栄光が現されるのです。私たちに、神の助けと、励ましと、導きが必要です。また、神の助けがなければ、神のみことばと聖霊の助けにより成長して、神のみこころを見分け、神のみこころを行い、神の栄光を現すことができません。神の働きが必要です。ですから、パウロは「私は祈っています。」と神の働きを確信して祈るのです。前回も見た通り、神が働きを完成してくださることをパウロは確信していました。そして、私たちも神を信頼し、確信をもって生きることができます。なぜなら、神は完全なお方であり、私たちに愛し、私たちに救い、私たちの救いを完成してくださるお方だからです。あなたは、神の栄光と誉れを現す秘訣をご存じでしたでしょうか？また、神の栄光と誉れを現す人生を願っておられたでしょうか？

パウロはこのピリピ1章で彼自身の生涯を通して、キリストのすばらしさが現されることを願いました。ピリピ1：19-20で「:20 私の願いは、どんな場合にも恥じることなく、今もいつものように大胆に語り、生きるにしても死ぬにしても、私の身によってキリストがあがめられることです。:21 私にとって生きることはキリスト、死ぬことは益です。」とパウロは語りました。パウロは人生のすべてを通して、キリストがあがめられ、神の栄光が現されることを願って生きたのです。キリストのすばらしさが現されるのが、彼の人生のすべてでした。彼の生きがいでした。彼は罪から自分を救ってくださったイエス・キリストの愛にとどまりました。皆さん、私たちはパウロのように、何物よりもイエス・キリストを愛するキリストの弟子として生きているのでしょうか？

〇まとめ

聖徒は神の栄光を現す者となります。つまり、聖徒であるあなたが、神の栄光を現す者となるのです。神が与えてくださる愛が動機であり、聖徒はいよいよ愛がすぐれたものとなり、神のみこころを見分けて、神のみこころを行う者となります。そして、結果として、聖徒は神の栄光を現す者となります。聖徒の内に、この救いのみわざを完成してくださるお方は神です。私たちは神の救いを信頼し、感謝し、神を愛して生きることができます。きょうご一緒に見てきたパウロの祈りを、あなたご自身の祈りとなさいませんか？神の聖徒として生きる生涯で、神の栄光と誉れを現す者となる決心をなさいませんか？

このような祈りが、あなたの祈りとならないでしょうか？私はこう祈ります。「私の愛が、いよいよすぐれたものとなり、真の知識とあらゆる識別力によって、私が神のみこころ、神の前に価値のある大切な

ことを見分けることができますように。私が、キリストの日に備えて、純真で非難されるところのない者となり、イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされて、神の栄光と誉れが現されますように。」私たちが罪から救ってくださっただけでなく、日々、キリストの日に備えて、私たちがキリストに似た者へと成長させてくださり、神の栄光と誉れを現す機会を与えてくださる神に、心から感謝します。